

# 風景構成法研究の文献展望

佐々木 玲 仁

## 1. 問題と目的

風景構成法とは、一般に「アイテム」とよばれる10の項目の名（川、山、田、道、家、木、人、花、動物、石）を「見守り手」と称される施行者が一つずつ言い、描き手が描画用紙に一つずつ描いていくという手順で行われる、描画法のうちの一技法である。ある一つのアイテムを描き終わると次のアイテムが呼ばれるという形で順に描かれ、最終的に一つの風景を描くことが描き手に要求される。この描画は、描き手が描き出す前に見守り手によって枠が付けられる。描き手はその中に見守り手の言葉を頼りに一つずつアイテムを「置いて」いき、一つの風景を作りだしてゆくのである。この方法で描かれた描画は、同一の手順で描かれていながら人によって実に様々であり、まさに千差万別と言ってよい。異なる描き手の描画を見比べるとき、同じ手順で描かれたものなのにここまで違うのかと感嘆することもしばしばである。

この方法は1970年に発表されて以来、さまざまな臨床実践の場でアセスメントとして、また心理療法の一技法として用いられてきた。また、この実践を支えるものとしての研究も盛んに行われてきている。これらの研究は、風景構成法の読み方をどう考えるか、あるいはどのような方法を用いて研究するかということによって、様々に分類できることは既に論じられている。風景構成法の読み方については、角野（2004）がいうように構成的・投影的・シンボリックな読み方が考えられる。これら3種類の読み方は排他的でなく、例えば構成的な読みとシンボリックな読みを併用するということが普通に行われている。また、研究法については、数量的であるか質的であるか、あるいは臨床事例についての研究かそうでないかによって4種類に分類できる（佐々木、2005）。風景構成法の研究について論じるときは、これらの視点から考えていくことが一般的であろう。

ところで、風景構成法を読み取り、実践の場で用いていくときに、この技法の性質から描画がどのように描かれていくかという描画プロセスが重要になってくることは明らかである。見守り手の発する言葉に応じてそれぞれのアイテムが描かれていくとき、そこで描き手がつぶやいた言葉やペンの運び、アイテム名が発せられたときの描き手の反応など、描かれていく様子自体が重要な「風景構成法の要素」となる。描かれたその線が、躊躇なく引かれたものなのか逡巡の末のしぼりだされたものか、あるいは手早く引かれたものなのか恐る恐る描かれたものかは、完成した絵を見るだけでは十分に窺い知ることはできない。

風景構成法を論じる上でもう一つ重要なのは、風景構成法を一枚限りでなく、複数の描画を一連のものとして読んでいくことである。中井（1992）が「縦断的に眺めることが必要であり、一枚の風景構成法から多くを読み取り過ぎることが戒められる」としているように、同一の描画者

の複数枚の描画の中の一枚として目の前の風景構成法を見る必要があることは様々な研究者が主張してきている通りである（中里，1984，皆藤，1996など）。

この二つの観点は、「描画プロセス」が一回の描画内での時間経過に沿った動きであるのに対して、「描画の展開」は複数回の描画間での時間経過に沿った動きであるといえる。言い換えると、プロセスは描画の微視的な時間依存性、展開は描画の巨視的な時間依存性であるということが言える。風景構成法研究にとって描画プロセスと描画の展開の両方が重要であるということは、風景構成法を時間軸に添った動きを意識して研究することの重要性を言っていることになる。

上記の二つの観点から風景構成法研究を見ていくと、この二つについて共に言及しているものばかりではないことがわかる。これは、それぞれの研究の目的から描画プロセスや描画の展開についてどれだけの重みづけをするかによってこの違いが出てきていると思われる。後述するように、描画プロセスや描画の展開という観点において、近年、風景構成法研究の動向に変化の兆しがあらわれており、これまでの研究について上記二つの観点から概観するのは有益であると考えられる。

そこで本稿では、風景構成法の先行研究について、「描画プロセス」と「描画の展開」という2つの軸から整理し、研究の動向を整理するとともに今後の課題について論じることとする。このときに、前述の「風景構成法の読み方」という観点と「研究法」の観点も補助的に用いていくことにする。

なお、「風景構成法の研究」というとき、一般には、風景構成法の性質自体を研究するものと、臨床事例の中で事例の理解のために風景構成法が用いられているものの両方を指すことが多いが、本稿では前者の風景構成法の性質自体についての研究のみを取り扱うことにする。臨床事例研究も対象とするが、論文の考察の中で風景構成法について触れているものに限定する。また、風景構成法についての理論だけを論じている研究、すなわち風景構成法について描画そのものを示すことなく理論について論じている研究も取り扱わないこととする。

## 2. 風景構成法研究の諸相

前節で述べた通り、風景構成法に関する研究を「描画のプロセス」「描画の展開」を軸に整理する。以下、「A. 描画プロセスを扱っている研究」「B. 描画の展開を扱っている研究」「C. 描画プロセス・展開とも扱っていない研究」の順に論ずる。描画プロセスと描画の展開を共に扱っている研究もあるため、AとBで重複している文献もある。

### A. 描画プロセスを扱っている研究

描画プロセスの記述には、風景構成法施行時に描き手によってアイテムが描かれていく過程そのものと施行時の言語的なやりとり、それを受けて見守り手を感じたことなどが含まれる。描画プロセスを扱っていない研究は「風景構成法にどのようなものが描かれたか」から読んでいくが、描画プロセスを扱う研究は「風景構成法がどのように描かれたか」という点も加えて描画について考察することができる。プロセスの記述には1回の施行についてのものも連続した複数回のものもあり、またごく簡単なものも非常に詳細なものもある。本稿では、これらの研究を「臨床」と「調査」に分けて紹介する。なお、「臨床」は心理臨床実践の中で治療の一環として施行されたものを指し、「調査」はそれ以外の状況、つまり風景構成法を研究する目的で描き手を募った上で施行されたものをいう。

(1) 臨床

臨床研究においてプロセスを記述するという事は、臨床事例の中で用いられた風景構成法を治療の流れと結びつけてその意味を考えていくものということができる。風景構成法が治療の中で生み出されてきたことを考えれば、このタイプの研究がプロセス研究のスタンダードだといえる。

描画プロセスに言及のある研究のうち臨床状況で行われたものを表1に示す。

|   |      |      |
|---|------|------|
| 描画をとおしてみた精神障害者<br>—とくに精神分裂病者における心理的空間の構造— | 中井久夫 | 1971 |
| 日常臨床の中の「風景構成法」*                           | 滝川一広 | 1984 |
| 急性分裂病状態の寛解過程における風景構成法の縦断的考察*              | 中里均  | 1984 |
| 一枚の風景構成法から                                | 皆藤章  | 1988 |
| 精神科デイ・ケアにおける「集団風景構成法」と「合同風景構成法」の試み*       | 佐藤文子 | 1991 |
| 心理療法と風景構成法                                | 皆藤章  | 1996 |
| 「集団風景構成法」と「合同風景構成法」の試み*                   | 佐藤文子 | 1996 |
| 風景構成法に関する二、三の興味ある知見                       | 山中康裕 | 1996 |

\*…「描画の展開」にも言及があるもの

中井(1971)は風景構成法の理論的考察の中で一枚の描画を例示する形でプロセスについて簡単に記している。山中(1996)では、提示している5事例中1例が描画プロセスを示したものになっている。ここでは、描画、彩色プロセスを示すことにより「川と道の取り違え」現象について記述されている。皆藤(1988)は、皆藤が精神病院で心理検査として行った一回の風景構成法について、アイテム毎の描画プロセスを描き手と見守り手のやりとりを含めて詳細に記述し、それぞれの段階および全体の流れについて考察を加えている。皆藤(1996)には、理論的な考察の中で挙げられている事例として、皆藤が風景構成法を施行しようとしてクライアントの拒否にあったプロセスについての記述がある。ここではこのプロセスを基に風景構成法を施行する心理臨床家の姿勢について論じられている。以上は1回の実施のプロセスを紹介または記述したものである。この中では皆藤(1988)が、模写ではあるがアイテムが描かれている途中の段階が描かれており、プロセスを考える素材として興味深い。

次に、展開にも言及している研究としては滝川(1984)と中里(1984)が挙げられる。前者は、この中では他の技法(バウムテスト、なぐり描き)の描画を織り交ぜながら施行された9回の風景構成法を、後者は複数回の風景構成法を施行した2つの症例(症例1で7回、症例2で10回)の描画を示し、それぞれの描画の描かれていくプロセスをごく簡単に記している。これらには治療過程と風景構成法の変遷の対応が描画プロセスを含めて記されていて、プロセスを研究する上で貴重なデータとなっている。また佐藤(1991, 1996)は、「集団風景構成法」と「合同風景構成法」を提案し、精神科デイケアにおける施行について報告している。合同法は複数の描き手が順番に描いていくというもので、必然的にプロセスについての記述がなされている。

(2) 調査

調査研究でプロセスを研究することの利点は、プロセスそのものを目的に研究を行うことがで

きる点にある。心理臨床実践の場とは切り離された状況ではあるものの、プロセスの記述のためにさまざまな方策を採り得るメリットは大きい。

描画プロセスに言及のある研究で調査として行われたものを表2に示す。

後藤（1996）は風景構成法のストーリー性の観点からとらえ、大学生76人に面接調査を行って風景構成法と「時間的展望」に関する質問紙を施行し、アイテムや構成パターン、構成プロセスについて「精神的視野」の観点から検討した。なお、8人分の描画を例としてあげている。

表2 描画プロセスに言及のあるもの（調査）

|                      |           |      |
|----------------------|-----------|------|
| 風景構成法における「ストーリー性」の問題 | 後藤智子      | 1996 |
| 風景構成法体験の語り*          | 皆藤章・中桐万里子 | 2004 |
| 風景構成法体験がもたらしたもの*     | 村松知子      | 2004 |
| 風景構成法におけるアイテムの描画時間*  | 佐々木玲仁     | 2004 |

\*…「描画の展開」にも言及があるもの

皆藤・中桐（2004）では、非臨床場面で施行された風景構成法の描き手と見守り手双方の描画状況における体験について記述から、風景構成法の場で何が起きているのかについて論じられている。村松（2004）は、描き手として2度にわたって風景構成法に参加した体験について記述している。ここで村松は「『描くことそのもの』や『描いていくプロセス』それ自体が描き手に気づきを促し、自身との対話を促進させていく」ことを知ったと述べている。この2論文は、描き手の側の体験を描き手自身が記述することで風景構成法の場で何が起きているかについて迫ろうとしたものである。佐々木（2004）は、同一の描き手が複数回描いた描画の各アイテムの描画時間に着目して描画プロセスについて論じている。

後藤の研究が多数の描き手の描画から統計的手法を用いて結論を導きだしているのに対して、あとの3論文は1人の描き手の描画を詳細に検討することによって議論を行っている。

これらの研究は時系列的に見ると、1996年を境にそれ以前は臨床で、それ以降は調査で行われていることがわかる。これは、臨床研究は事例研究法を用い、調査研究は数量的方法を用いるということが当然視されていたことが大きな要因として考えられる。このように考えると、調査研究は大量のデータを採ることが必要となり、個々の描画のプロセスに踏み込んで研究することは困難であったことだろう。しかし、2004年の3つの研究のように、調査研究でもいわゆる事例研究のように少数例を詳細に研究するという方法を採用することで、調査研究の利点を生かしながらプロセスの研究を行うことが可能になったと考えられる。

## B. 描画の展開を扱っている研究

描画の展開を扱う研究も、描画プロセスの研究と同様に「臨床」と「調査」に分けて記述する。

### (1) 臨床

中里（1984）が指摘するように、風景構成法を用いるにあたっては同一描画者の描画の「相対的指標」に注目すること、すなわち描画の変化に着目することが重要である。これは風景構成法の原点ともいべき基礎的な観点であるといえる。展開への言及のある臨床研究は数が多いため、ここではその読み方について角野（2004）のいう構成的観点があるかないかでさらに分類する。構成的観点とは、描画に描かれた風景空間の構造から描き手の心的状態について多くを読み取っ

ていく見方で、中井（1970, 1971, 1972）で風景構成法が創案された際に用いられた最も基本的な読み方である。構成はその構造によってH型, P型（中井, 1970）, 離反型, 近接型, 固着型（高江洲・大森, 1984）などに分類される。

a. 構成的な読み方を行っている研究

描画の展開に言及している臨床的研究で、構成的な読み方を行っているものを表3に示す。

表3 描画の展開に言及のあるもの（臨床-構成的観点のあるもの）

|   |   |
|---|---|
| 精神分裂病者の風景画と〈間合い〉                                  | 高江洲義英<br>高江洲田鶴子 吉田正子 1976<br>国分京子 橋本ヒロ子 |
| 短報 十余年後に再施行した風景構成法                                | 中井久夫 1983                               |
| 日常臨床の中の「風景構成法」*                                   | 滝川一広 1984                               |
| 急性精神病状態からの寛解過程における里塚としての風景構成法と脳波所見                | 向井巧 1984                                |
| 急性分裂病状態の寛解過程における風景構成法の縦断的考察*                      | 中里均 1984                                |
| 急性分裂病者の回復過程における世界図式の変遷-風景構成法による検討-                | 衛藤進吉 1985                               |
| 臨界期描画の意味するもの                                      | 市橋秀夫 1985                               |
| 風景構成法 -その未来と方向性-                                  | 伊集院清一 中井久夫 1988                         |
| 拡大風景構成法における天象・地象表現と精神的視野                          | 伊集院清一 1989                              |
| 精神科デイ・ケアにおける「集団風景構成法」と「合同風景構成法」の試み*               | 佐藤文子 1991                               |
| 事例研究の中の風景構成法-読みとりの解説を中心に                          | 皆藤章 1994a                               |
| 拡大風景構成法 -表象機能と分裂病の表現病理, 雲の描画法, 空・星空の風景, そして地上への回帰 | 伊集院清一 1996                              |
| 風景構成法を通しての急性精神分裂病の治療過程における一考察                     | 角野善宏 1997                               |
| 精神療法の過程と心理検査 -風景構成法-                              | 角野善宏 1999                               |
| 風景構成法から見た急性精神病状態からの回復過程の特徴 -4事例からの考察-             | 角野善宏 2001                               |
| 描画療法から見たこころの世界 統合失調症の事例を中心に                       | 角野善宏 2004                               |
| 継続面接における風景構成法の作品変化について                            | 渡部未沙 2005                               |

\*…「描画プロセス」にも言及があるもの

このうち中井（1983）では、入院患者として風景構成法を施行した5名の描画の、十余年後に施行したときのものとの比較について論じられている。5名の描画の変化は「全体的改善にもかかわらずおどろくほど変化がなかった例」「生活は維持されているのに水準低下が続く例」など様々である。短報の形で記載され、描画自体の提示はない。衛藤（1985）は、風景構成法を描くに先立って要請される、主体内部の何らかの内的空間基準を「世界図式」と呼び、風景構成法によってその変遷を追うことで急性分裂病状態からの回復過程を検討している。ここでは3症例を挙げ、それぞれ複数枚の描画が提示されている。この論文や伊集院・中井（1988）、角野（1999）は複数の事例についてそれぞれ少数の描画を示しており、「展開」というよりも「変化」を追うものである。

これに対して、事例の中で描かれた多くの描画を示すことでその流れを示している研究もある。先にプロセスの項で挙げた滝川（1984）（9回）、中里（1984）（症例1で7回、症例2で10回）に加えて、向井（1984）では5回、角野（1997）では9回の風景構成法が施行されている。また、角野（2001）では4事例について4～8回施行した風景構成法を示し、治療の流れと描画の変遷が示されている。これらの研究のうち向井（1984）は、急性精神病状態からの寛解過程について、風景構成法を心理レベルの里程標、脳波を生理レベルの里程標として用いることの有用性を1事例の経過を詳述することで示している。また、角野（2001）は、急性精神病状態からの回復過程における風景構成法の特徴を4事例を挙げて検討し、考察で風景構成法の変化の着目点として「川と道の関係」「誘目性」「色調、塗り方、塗り残しの有無」「奥行き」の程度」を挙げている。

この他、伊集院（1989, 1996）は通常の風景構成法に加えて「空」「星」を描く「拡大風景構成法」について、複数回描かれた症例について紹介している。渡部（2005）は学生相談での複数事例について、様々な指標の変化について考察している。これは、臨床研究の中でも多数の事例を集め、統計的にデータを処理している数少ない研究である。この中で渡部は、風景構成法について、自験例、すなわち研究者自身が臨床事例として出会う風景構成法と、調査のための施行によるものとは描画の傾向が異なると考えられることを指摘している。

b. 構成的な読み方を行っていない研究

描画の展開に言及している臨床的研究で、構成的な読み方を行っていないものを表4に示す。

構成的観点が無いものは、必然的にその描かれた内容を中心に風景構成法を読み取っていくことになる。

表4 描画の展開に言及のあるもの（臨床—構成的観点のないもの）

|   |       |       |
|---|-------|-------|
| 「風景構成法(中井,1970年)」と「イメージ造形技法」を主とする心理療法過程への適用 | 後藤佳珠  | 1984  |
| 心理臨床のなかの風景構成法 —ある女性の入院から結婚まで—               | 皆藤章   | 1994b |
| 「集団風景構成法」と「合同風景構成法」の試み*                     | 佐藤文子  | 1996  |
| 移民と風景構成法                                    | 桑山紀彦  | 1996  |
| 競技者と風景構成法<br>—絵に表現された「無意識」と「身体」—            | 中島登代子 | 1996  |
| 小児科、精神科と風景構成法                               | 待鳥浩司  | 1996  |
| 風景構成法に関する二、三の興味ある知見*                        | 山中康裕  | 1996  |

\*…「描画プロセス」にも言及があるもの

桑山（1996）、中島（1996）、待鳥（1996）は、それぞれ、フィリピンから日本の農村に嫁いだいわゆる「外国人花嫁」、運動競技者、小児科入院患者の風景構成法について、最大三回の施行から描き手の変化に言及するものである。特定の属性を持つ描き手の描画について論じているため、問題の背景について詳述してあるのがこれらの論文の特徴である。なお、桑山は風景構成法の状況依存性に触れ、「一枚読みるときは『障害』になりやすかった『状況依存性』が逆に継時的変化を見る段になると実に有効に作用する」との指摘を行っている。

皆藤（1994b）は、治療の経過にともなって9回にわたって施行された風景構成法について提示しているもので、このような型のものとしては構成的な読み方を行っていない数少ないものである。描画自体とともに、描画に対する治療者の印象が毎回記されている。また、山中（1996）は、

1回目で川と道の取り違えが起きたが2回目では起きなかった事例について述べている。

臨床で描画の展開に言及している研究では、少数の例外はあるものの、構成的な観点を採るものは統合失調症（分裂病）者の治療過程を追うものが多く、それ以外の描き手に対しては構成というよりも描かれたものの内容の変遷から読み取ることが多いようである。

(2) 調査

描画の展開に言及したもののの中で調査研究として行われたものを表5に示す。

皆藤（1994c）は風景構成法の基礎研究として再検査信頼性の研究を行っている。風景構成法は必ずしも結果が変化しないことを期待されるものではないため、ここでの「信頼性」とは、同一人物が複数回風景構成法を描いたときにどれだけ変化しないかという「安定性」のことと考えて良いだろう。この研究では、極めて多数の指標を用いて統計的に比較を行ない、「風景構成法には描き手個人に特有の構成・表現様式が持続的に反映されている」との結論を得ている。

皆藤・中桐（2004）と村松（2004）では、共に皆藤が見守り手として関与している2回の風景構成法について、前者では描き手・見守り手双方の、後者では見守り手の風景構成法体験の記述とその考察が記されている。前者では描画状況そのものは1回のものしか記載されていないが、描き手がそれ以前に集団法で描いたときの体験との比較が論じられている。後者では2回の施行について記述され、その体験の違いについて論じられている。佐々木（2004）では、アイテムの描画時間という切り口から調査状況での同一描画者（1名）の6回の描画について検討を加え、描画時間の変化から考察を行っている。

皆藤（1994c）は数量的な検討だが、2004年の3論文は1人の描き手についての詳細な検討であり、このような形での研究の方法論については佐々木（2005）で質的研究法として論じられている。

表5 描画の展開に言及のあるもの（調査）

|                     |           |       |
|---------------------|-----------|-------|
| 風景構成法の再検査信頼性        | 皆藤章       | 1994c |
| 風景構成法体験の語り*         | 皆藤章・中桐万里子 | 2004  |
| 風景構成法体験がもたらしたもの*    | 村松知子      | 2004  |
| 風景構成法におけるアイテムの描画時間* | 佐々木玲仁     | 2004  |

\*…「描画プロセス」にも言及があるもの

時系列的に描画の展開について言及のある研究を見ていくと、臨床での研究は1980年代から現在まで継続しているのに対して、調査としての研究、特に数量的な扱いをしない研究は2000年代に入ってから行われるようになってきたということが見て取れる。

C. 描画プロセス・展開とも扱っていない研究

前述のように、風景構成法にとって描画プロセスや展開を考慮することは必須ともいうべき重要性を持っているが、そのどちらにも触れていない研究も少なくない（表6）。これらの研究にはいくつかの種類があるが、ほとんどは大量の風景構成法描画について分析する必要があり、そのためにプロセスにも展開にも触れないという形式をとったものと思われる。

まず、他技法との比較を行っている研究群がある。表6の中の市橋（1984）、皆藤（1994h）、弘田・小野ら（1988）、弘田・三船ら（1996）、井原（1993, 1996）、井上（1984）、大石（1988）が

これにあたる。比較されている技法は、ロールシャッハテストや箱庭、他の描画法や質問紙法など多岐にわたっている。この中では、井原（1996）が風景構成法では三次元表現に、箱庭では二次元表現にそれぞれ親和性があるとの指摘を行っており興味深い。

表6 描画プロセス、描画の展開ともに言及のないもの

|  |                                   |       |
|--|-----------------------------------|-------|
| 慢性分裂病者の体験構造と描画様式                               | 市橋秀夫                              | 1972  |
| 自我発達における小学校中学年の位置づけ<br>—自我体験度尺度および風景構成法を通して—   | 宮藤恭子                              | 1983  |
| 「風景構成法」事始め                                     | 山中康裕                              | 1984  |
| 風景構成法と家風画二面法                                   | 井上亮                               | 1984  |
| 他技法との比較  | 市橋秀夫                              | 1984  |
| 風景構成法の基礎的研究<br>発達の様相を中心に                       | 弘田洋二                              | 1986  |
| 「風景構成法」による神経症的登校拒否の研究                          | 弘田洋二 長屋正男                         | 1988  |
| 「風景構成法」の研究 —箱庭作品との関連—                          | 弘田洋二,小野浩子,<br>森鼻雅代,武田宣子,<br>岩堂美智子 | 1988  |
| 風景構成法から見た前青年期の心理的特徴について                        | 高石恭子                              | 1988  |
| 風景構成法について(1) PPスタディとの関連                        | 大石勝代                              | 1988  |
| 風景構成法における誘目性                                   | 皆藤章                               | 1991a |
| 風景構成法表現の分析 —健常者と病者の比較検討—                       | 皆藤章                               | 1991b |
| 風景構成法における風景の中の自己位置                             | 皆藤章                               | 1991c |
| 貼り絵による風景構成法についての研究<br>—非行少年,慢性分裂病者,健常青少年を比較して— | 波多康正隆 山上栄子<br>中井久夫                | 1992  |
| 風景構成法と箱庭における空間の表現の特徴について                       | 井原彩                               | 1993  |
| 風景構成法における人物像と風景の中の自己像                          | 皆藤章                               | 1994d |
| 風景構成法における項目提示順序                                | 皆藤章                               | 1994e |
| 数量的研究のための読みとり指標                                | 皆藤章                               | 1994f |
| 風景構成法における誘目性                                   | 皆藤章                               | 1994g |
| 風景構成法と他技法との比較                                  | 皆藤章                               | 1994h |
| 風景構成法における大学生の構成型分布と各アイテム<br>の分析                | 高石恭子                              | 1994  |
| 箱庭との空間比較                                       | 井原彩                               | 1996  |
| 「風景構成法」に関する研究 (その2)<br>—ロールシャッハテストとの関連—        | 弘田洋二, 三船直子,<br>原志津, 岩堂美智子         | 1996  |
| 風景構成法における構成型の検討<br>—自我発達との関連から                 | 高石恭子                              | 1996  |
| 風景構成法における個性と構成<br>—構成段階の細分類の試み                 | 多田昌代                              | 1996  |
| 風景構成法の基礎的研究 —「構成」の視点から—                        | 渡部加奈子 相馬壽明                        | 1998  |
| 風景構成法の川による構成分類<br>—幼稚園児・小学生・大学生の作品による空間論的検討—   | 岡崎甚幸 柳沢和彦                         | 2000  |
| 風景構成法における大景群アイテムの描画面積                          | 佐々木玲仁                             | 2000  |
| 風景構成法の構成のあり方を通して見た離人感の心的<br>意味                 | 松下姫歌                              | 2002  |



また、発達と構成型についての研究群であるが、宮脇（1983）、高石（1988, 1994, 1996）の発達と構成の型についての研究が代表的である。この1連の研究では7つの構成型が抽出されている。この構成の型については、弘田（1986）の5段階の「構成度」、皆藤（1994f）の9段階の「構成段階」と7段階の「空間段階」が提案されているが、後の細分化の試みや他の研究での利用頻度から、構成の分類に関しては高石（1996）のものが定着していると考えられる。なお、高石の構成型の第VI・VII型については、多田（1996）が下位分類を試み、12の型を得ている。また、松下（2002）では、離人感について検討するにあたって、高石（1996）のVI型からVI-型を分離している。佐々木（2000）は、高石（1996）の構成型を用いるにあたって見通し良く分類を行うために、分類基準を2次元の表に展開する試みを行っている。

これ以外の研究としては、風景構成法の基礎研究として山中（1984）、皆藤（1994d,e,f,g,h）、渡部・相馬（1998）が行われている。また、前出の松下（2002）は、離人感の心的意味を風景構成法の構成のあり方を通して検討している。

描画プロセス、展開とも扱っていない研究では、臨床研究は2つのみ（弘田・長屋, 1988, 井上, 1984）で、あとは調査研究である。調査研究は1980年代から継続して行われているといえる。

### 3. 考察

風景構成法のプロセスへの言及については、1996年を境に臨床研究から調査研究への遷移が起こっている。さらに、展開に言及した研究と比較すると、そもそもその数は少ない。これは、プロセスを研究に乗せていくことの困難さを反映していると考えられる。描画プロセスには膨大な量の情報が含まれており、それをどのように記述するかは非常に難しい。その中でプロセスに焦点を絞っていくほど、何かしらの方法的な工夫が求められる。それが、描き手自身が風景構成法体験について記述することであり（皆藤・中桐, 2004, 村松, 2004）、アイテムの描画時間の計測である（佐々木, 2004）。このような工夫は、当然のことながら臨床実践の中では行い難い。描画プロセスの研究が臨床研究から井原（1996）の数量的な研究を経て（長いブランクの後）2004年の調査研究へと移っていった背景には、プロセスを研究するにあたって焦点をより絞り込みんだ研究を行うという必要性があったためと考えられる。

次に、描画の展開の研究では、臨床の研究が1980年代から現在に至るまで継続されているのに対し、調査研究は1994年以降に限られており、4本中3本が2004年のもので、その数自体も少ない。また、この4本のうち3本が2回の施行に留まっており、展開に言及している調査研究は貧弱であると言わざるを得ない。展開に言及のない調査研究は継続的に行われていることを考えると、近年まで展開に言及するのは臨床研究であり、調査研究は1回だけの施行を基に行うものであると考えられていたということが言える。しかし、調査研究を実践の場である臨床状況により役立つようにしていくためには、調査といえども描画の展開を含んだ形で行っていくことが必要になっていくのではないだろうか。

風景構成法研究の今後の課題としては、調査研究はプロセスについても展開についても現在のところ十分に研究が行われているとはいいがたい。今後はこの両方の観点を加味したより臨床の実際に有用である研究を行っていくことが重要であろう。また、臨床研究については、展開に言及した研究は続けられているが、描画プロセスに言及したものはここ10年近く行われていない。

これは臨床状況でプロセスが注目されていないということではなく、研究として成立する段階でプロセスの記述が落とされるということであろう。今後は臨床研究においても描画プロセスの情報も記述されることが重要になってくると考えられる。

臨床にせよ調査にせよ、描画プロセスと描画の展開の両方を記述するという事は、描画の微視的な時間の流れと巨視的な時間の流れに共に目配りをするということでもある。この二つの時間の流れの両方を意識しながら研究を行っていくことが、風景構成法研究の質を上げていく上で必要になってくると筆者は考えている。

## 文献

- 衛藤進吉(1985)：急性分裂病者の回復過程における世界図式の変遷－風景構成法による検討－. 芸術療法, 16, 7-14
- 後藤佳珠(1984)：「風景構成法(中井,1970年)」と「イメージ造形技法」を主とする心理療法過程への適用. 山中康裕編 H・NAKAI 風景構成法 中井久夫著作集別巻1 岩崎学術出版社, 189-223
- 後藤智子(1996)：風景構成法における「ストーリー性」の問題. 山中康裕編 風景構成法その後の発展 岩崎学術出版社, 287-312
- 波多腰正隆・山上栄子・中井久夫(1992)：貼り絵による風景構成法についての研究－非行少年, 慢性分裂病者, 健常青少年を比較して－. 日本芸術療法学会誌, 23(1), 24-33
- 弘田洋二・三船直子,原志津・岩堂美智子(1996)：「風景構成法」に関する研究(その2)－ロールシャッハテストとの関連－. 大阪市立大学生生活科学部紀要, 38, 181-189
- 弘田洋二・小野浩子・森鼻雅代・武田宣子・岩堂美智子(1988)：「風景構成法」の研究－箱庭作品との関連－. 大阪市立大学生生活科学部紀要, 36, 179-187
- 弘田洋二(1986)：風景構成法の基礎的研究 発達的な様相を中心に. 心理臨床学研究, 3(2), 58-70
- 弘田洋二・長屋正男(1988)：「風景構成法」による神経症的登校拒否の研究. 心理臨床学研究, 5(2), 43-58
- 市橋秀夫(1972)：慢性分裂病者の体験構造と描画様式. 芸術療法, 4, 27-35
- 市橋秀夫(1984)：他技法との比較. 山中康裕編 H・NAKAI 風景構成法 中井久夫著作集別巻1 岩崎学術出版社, 139-161
- 市橋秀夫(1985)：臨界期描画の意味するもの. 芸術療法, 16, 23-31
- 井原彩(1993)：風景構成法と箱庭における空間の表現の特徴について. 箱庭療法学研究, 6(2), 38-49
- 井原彩(1996)：箱庭との空間比較. 山中康裕編 風景構成法その後の発展 岩崎学術出版社, 313-330
- 伊集院清一・中井久夫(1988)：風景構成法－その未来と方向性－. 臨床精神医学, 17(6), 957-968
- 伊集院清一(1989)：拡大風景構成法における天象・地象表現と精神的視野. 芸術療法, 20, 29-46
- 伊集院清一(1996)：拡大風景構成法－表象機能と分裂病の表現病理,雲の描画法,空・星空の風景,そして地上への回帰. 山中康裕編 風景構成法その後の発展 岩崎学術出版社, 111-143
- 井上亮(1984)：風景構成法と家屋画二面法. 山中康裕編 H・NAKAI 風景構成法 中井久夫著作集別巻1 岩崎学術出版社, 163-187
- 角野善宏(1997)：風景構成法を通しての急性精神分裂病の治療過程における一考察 枠構造の治療的意義も含めて. 心理臨床学研究, 15(4), 416-427
- 角野善宏(1999)：精神療法の過程と心理検査－風景構成法－, 精神療法, 25(1), 16-23
- 角野善宏(2001)：風景構成法から観た急性精神病状態からの回復過程の特徴－4事例からの考察－. 臨床心理学, 1(1)
- 角野善宏(2004)：描画療法から観たところの世界 統合失調症の事例を中心に. 日本評論社
- 皆藤章(1988)：一枚の風景構成法から.「河合隼雄教授還暦記念論文集－臨床的知の研究」下巻 山中康裕・斉藤久美子編 創元社, 217-232
- 皆藤章(1991a)：風景構成法における誘目性. 人文研究 大阪市立大学文学部紀要 第一分冊, 43, 25-51
- 皆藤章(1991b)：風景構成法表現の分析－健常者と病者の比較検討－, 大阪市立大学文学部教育学教室

## 佐々木：風景構成法研究の文献展望

紀要 教育学論集, 17, 26-46

皆藤章(1991c)：風景構成法における風景の中の自己位置. 心理臨床学研究, 8(3), 66-74

皆藤章(1994a)：事例研究の中の風景構成法 一読みとりの解説を中心に. 風景構成法 その基礎と実践. 誠信書房, 195-205.

皆藤章(1994b)：心理臨床のなかの風景構成法 一ある女性の入院から結婚まで一. 風景構成法 その基礎と実践 誠信書房, 105-139

皆藤章(1994c)：風景構成法の再検査信頼性. 風景構成法 その基礎と実践 誠信書房, 244-269

皆藤章(1994d)：風景構成法における人物像と風景の中の自己像. 風景構成法 その基礎と実践 誠信書房, 64-79

皆藤章(1994e)：風景構成法における誘目性. 風景構成法 その基礎と実践 誠信書房, 80-104

皆藤章(1994f)：風景構成法における項目提示順序. 風景構成法 その基礎と実践 誠信書房, 270-282

皆藤章(1994g)：風景構成法と他技法との比較. 風景構成法 その基礎と実践 誠信書房, 209-243

皆藤章(1994h)：風景構成法と他技法との比較. 風景構成法 その基礎と実践 誠信書房, 209-243

皆藤章(1996)：心理療法と風景構成法. 山中康裕編 風景構成法その後の発展 岩崎学術出版社, 45-64

皆藤章・中桐万里子(2004)：風景構成法体験の語り. 皆藤章編 風景構成法のとくと語り 誠信書房, 53-91

桑山紀彦(1996)：移民と風景構成法. 山中康裕編 風景構成法その後の発展 岩崎学術出版社, 219-236

待鳥浩司(1996)：小児科,精神科と風景構成法. 山中康裕編 風景構成法その後の発展 岩崎学術出版社, 167-182

松下姫歌(2002)：風景構成法の構成のあり方を通して見た離人感の心的意味. 箱庭療法学研究, 14(2), 63-74

宮脇恭子(1983)：自我発達における小学校中学年の位置づけ 一自我体験度尺度および風景構成法を通して一. 京都大学大学院教育学研究科修士論文(未公刊)

向井巧(1984)：急性精神病状態からの寛解過程における里程標としての風景構成法と脳波所見. H・NAKAI 風景構成法 中井久夫著作集別巻1 山中康裕編 岩崎学術出版社, 73-118

村松知子(2004)：風景構成法体験がもたらしたもの. 皆藤章編 風景構成法のとくと語り 誠信書房, 92-121

中井久夫(1970)：精神分裂病者の精神療法における描画の使用 一とくに技法の開発によって作られた知見について一. 芸術療法, 2, 77-90

中井久夫(1971)：描画をとしてみた精神障害者 一とくに精神分裂病者における心理的空間の構造一. 芸術療法, 3, 37-51

中井久夫(1972)：精神分裂病の寛解過程における非言語的接近法の適応決定. 芸術療法, 4, 13-25

中井久夫(1983)：短報 十余年後に再施行した風景構成法. 芸術療法, 14, 57-59

中井久夫(1992)：風景構成法. 精神科治療学, 7(3), 237-248

中島登代子(1996)：競技者と風景構成法 一絵に表現された「無意識」と「身体」一. 山中康裕編 風景構成法その後の発展 岩崎学術出版社, 183-218

中里均(1984)：急性分裂病状態の寛解過程における風景構成法の縦断的考察. 山中康裕編 H・NAKAI 風景構成法 中井久夫著作集別巻1 岩崎学術出版社, 225-244

岡崎甚幸・柳沢和彦(2000)：風景構成法の川による構成分類 一幼稚園児・小学生・大学生の作品による空間論的検討一. 日本箱庭療法学会第14回大会発表論文集

大石勝代(1988)：風景構成法について(1) PFスタディとの関連. 人間発達研究, 13, 13-22

佐々木玲仁(2000)：風景構成法における大景群アイテムの描画面積. 札幌学院大学卒業論文(未公刊)

佐々木玲仁(2004)：風景構成法におけるアイテムの描画時間. 甲南大学学生相談室紀要, 40-50

佐々木玲仁(2005)：風景構成法研究の方法論について. 心理臨床学研究, 23(1), 33-43

佐藤文子(1991)：精神科デイ・ケアにおける「集団風景構成法」と「合同風景構成法」の試み. Artes Liberales 岩手大学人文学部紀要, 48, 187-205

佐藤文子(1996)：「集団風景構成法」と「拡大風景構成法」の試み. 山中康裕編 風景構成法その後の発展

岩崎学術出版社, 144-166

多田昌代(1996): 風景構成法における個性と構成 - 構成段階の細分類の試み. 山中康裕編「風景構成法  
その後の発展」 岩崎学術出版社, 265-286

高江洲義英・高江洲田鶴子・吉田正子・国分京子・橋本ヒロ子(1976): 精神分裂病者の風景画と<間合  
い>. 芸術療法, 7, 7-16

高江洲義英・大森健一(1984): 風景と分裂病心性 - 風景構成法の空間論的検討 -. 山中康裕編 H・NA  
KAI 風景構成法 中井久夫著作集別巻1 岩崎学術出版社, 119-137

高石恭子(1988): 風景構成法から見た前青年期の心理的特徴について. 京都大学教育学部心理教育相談  
室紀要 臨床心理事例研究, 15, 242-248

高石恭子(1994): 風景構成法における大学生の構成型分布と各アイテムの分析. 甲南大学学生相談室紀  
要, 2, 38-47

高石恭子(1996): 風景構成法における構成型の検討 - 自我発達との関連から. 山中康裕編 風景構成法  
その後の発展 岩崎学術出版社, 239-264

滝川一広(1984): 日常臨床の中の「風景構成法」. 山中康裕編 H・NAKAI 風景構成法 中井久夫著作集  
別巻1 岩崎学術出版社, 37-72

内海健・伊集院清一(1994): 拡大風景構成法の早期適用の試み - 空の描画に現れた緊張病者の回復過程.  
芸術療法, 25(1), 40-50

渡部加奈子・相馬壽明(1998): 風景構成法の基礎的研究 - 「構成」の視点から -. 茨城大学教育学部紀  
要(教育科学), 47, 141-151

渡部未沙(2005): 継続面接における風景構成法の作品変化について. 心理臨床学研究, 22(6), 648-658

山中康裕(1984): 「風景構成法」事始め. 山中康裕編 H・NAKAI 風景構成法 中井久夫著作集別巻1  
岩崎学術出版社, 1-36

山中康裕(1996): 風景構成法に関する二, 三の興味ある知見. 山中康裕編 風景構成法その後の発展 岩  
崎学術出版社, 333-346

(心理臨床学講座 博士後期課程3回生)

(受稿2005年9月9日、改稿2005年11月28日、受理2005年12月8日)

## A Literary Review of the "Landscape Montage Technique"

SASAKI Reiji

This report reviews various studies on the Landscape Montage Technique (LMT), from 2 viewpoints, "referring to process of drawing" and "referring to the change in multiple drawings". The literature for this argument was divided into clinical and non-clinical studies. In addition, classification with reading strategy was utilized to determine whether "structural reading" was applied or not. From this review, two tendencies within the studies are highlighted: (1) prior to 1996, studies treating the drawing process had been conducted as clinical studies, and after 1996, as non-clinical studies; (2) there are successive clinical studies treating change in multiple drawings, however, non-clinical studies of this type are very few. Future problems in research of LMT are development of both the "process of drawing" and "change in multiple drawings" in clinical and non-clinical studies and further in clinical studies, to restart the studies on the "process of drawing".